

[調査研究]

東北大学附属図書館で発見されたインキュナブラについて

— Plinius Secundus, Gaius, *Historia Naturalis*, [Venice: 1483]
found in Tohoku University Library —

小川 知幸

1. はじめに

インキュナブラ(incunabula)とは、ラテン語で「揺りかごに載せられたもの」や「嬰兒のお包み」(swaddling clothes)などを意味し、転じて出生地や幼年期、発展初期などを表す言葉になった¹。とくに書籍にかんしては、ヨハネス・グーテンベルクが1455年頃に可動式金属活字による活版印刷術(Printing Press using Movable Metal Type)を開発してから1500年末に至るまでの約50年間に作られたものを指す²。わが国では、「揺籃期本」や「15世紀本」などと呼ぶことがある。

インキュナブラには現在の書誌の公式のために必要となるタイトルページやコロフォン、ページ付け(pagination)などが存在しないことが多い。大英図書館(The British Library)のIncunabula Short Title Catalogue (ISTC)には、2016年までに約3万点のインキュナブラが登録されており³、わが国では、2004年までに383点の所蔵が確認されている⁴。その中には、東北大学附属図書館が所蔵しているエウクレイデス『幾何学原論』(Euclides, *Elementa geometriae*, Venice: Erhard Ratdolt, 1482)も含まれている⁵。同館の所蔵するインキュナブラは、これまでこの1点(1冊)のみであった。

この度、2023年3月に筆者が書庫での書架検索中に発見した1冊の書籍が、さらにこれとは別のインキュナブラであ

ることが判明した。タイトルを予め述べておくと、これは大プリニウスと呼ばれるガイウス・プリニウス・セクンドゥスの、現存する代表的著作である『博物誌』(または『自然誌』)であり、1483年にヴェネツィアで刊行された一書である(Plinius Secundus, Gaius, *Historia Naturalis*, [Venice: 1483])。

本稿では、同定の方法と過程、書誌、出版の経緯、そして、プリニウスによって『博物誌』がどのように著されたかについて報告する。



図1 「プリニウスの『博物誌(自然誌)』Plinius Secundus, Gaius, *Historia Naturalis*, [Venice: 1483]の背タイトル。全体はパーチメントで装丁されており、このタイトル部分は表装を薄く染色して箔押しされている

1 Online Etymology Dictionary, Incunabula (n.): <https://www.etymonline.com/word/incunabula> (2023.4.7閲覧) インキュナブラという用語は、ベルンハルト・フォン・マリンクロート(Bernhard von Mallinckrodt, 1591–1664)が1640年に刊行したDe ortu et progressu artis typographicae dissertatio historicaのなかで初めて適用した。小川知幸「ヘルマスベルガー公正証書について — 翻訳と解説 —」『東北大学附属図書館調査研究室年報』第6号, 2019, p. 3参照。

2 ただし、現在のグレゴリオ暦(1582年制定)と異なり、当時はユリウス暦を初めとして各地でさまざまな暦が使用されていたことから、この場合の15世紀末は1501年4月10日までとされる。

3 2016年8月までの時点で30,518 editionsが登録されている。ただし、その中には16世紀の刊本も紛れている可能性があるとのことである。

<https://data.cerl.org/istc/search> (2023.4.8閲覧)

4 雪嶋宏一『本邦所在インキュナブラ目録』第2版 (Incunabula in Japanese Libraries = IJL2), 雄松堂出版, 2004

5 上掲書, No.164, また、『東北大学附属図書館所蔵 新訂貴重図書目録 洋書篇 付ホップズ・コレクション目録』東北大学附属図書館, 2004, No.40参照。

2. タイトルと版の特定

2.1 外形について

書籍は、外形が縦307mm, 横218mm, 厚さ66mmのパーチメント装であり、本文の大きさ(Leaf size)は縦301mm, 横200mmである。背には合計7本の背バンドによる盛り上がりが見える。バンド間の上から2番目には箔押しで「C. PLINII / HISTORIÆ」の背タイトル(spine title)が付けられ、箔押しの枠にそって茶色で長方形に薄く染めてある(図1)。装丁様式は、およそ17世紀から18世紀前半にかけてのものと推定される(図2)。

表紙を開くと、見返し紙(past-down end-paper)には、「Ex Libris Aloysii Moriani M: Phylosophiaequæ Doctoris anno Domini 18()27」と手書きで大書されており、その下には「ed. MCCCCLXIXc 12」と、別の筆跡で手書きされた貼り紙がある(図3)。

このAloysius Morianusとは、旧蔵者の一人であろう。

ラテン語化された場合Aloysiusは、フランス人であればLouis, Luisなどの可能性もあるが、残念ながら詳細は不明である。「1827」は入手年と考えられる。

一方、ローマ数字の「ed. MCCCCLXIXc 12」は「1469年版」と読める。巻末の見返し紙にも同じ筆跡で、直に同じく「ed. MCCCCLXIXc 12」の書き込みがあり、また別の筆跡で「1469」と書き込まれている。したがって、複数の人びとが、本籍をこの年代のものと信じていたようだ。だが、果たして年代はそれに該当するのだろうか。

書籍には、通常であれば見返し紙と対面になる遊び紙(fly-leaf)はない。また、タイトルページもない。本文は第1葉(1st leaf)から唐突に始まる。葉番号(foliation)もページ付けもないので、この書籍のページの記載には、各葉右下にある折記号(signature)を使用するほかない。その点から、少なくとも16世紀終わり頃までの書籍に該当することは確かであろう⁶。

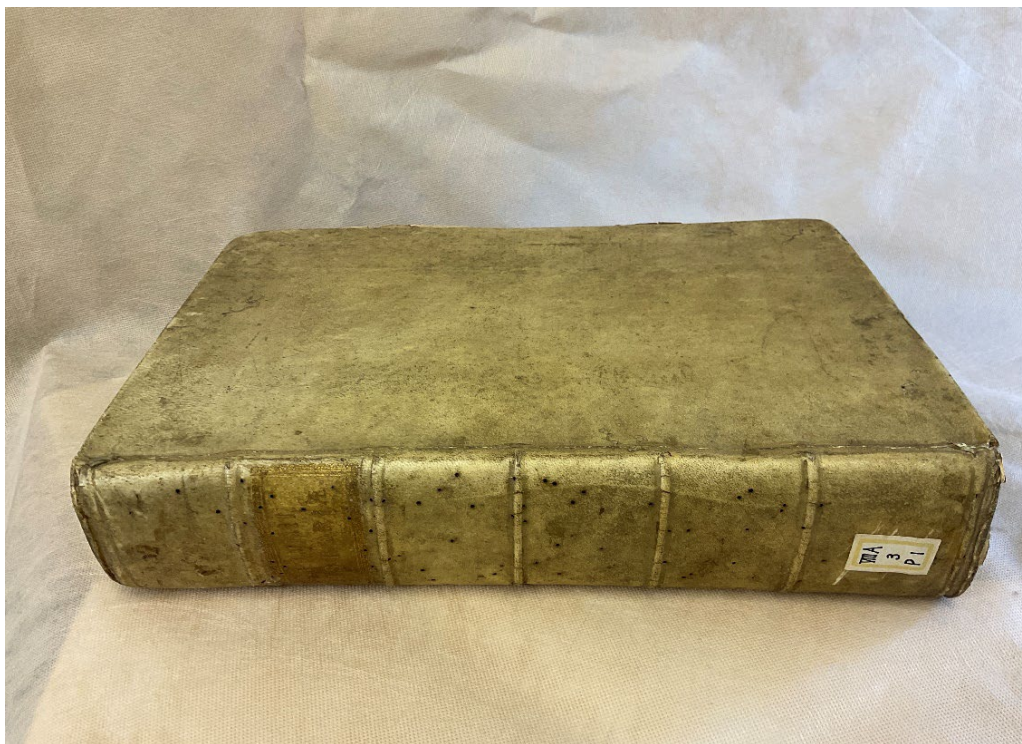


図2 書籍の外形の全体像。縦307mm, 横218mm, 厚さ66mmの大型本である。表装から7本の背バンドが盛り上がっている。この装丁は、およそ17世紀から18世紀前半までの様式であろう

6 書籍のページ付けは、1580年代に30パーセント程度、1590年に40パーセントをこえて普及を示すが、イタリア、ドイツ南・東部ではその発展は遅れたという。雪嶋宏一「西洋におけるページ付

けの起源と発展過程について」『早稲田大学 教育・総合科学学術院 学術研究(人文科学・社会科学編)』第66号, 2018, pp. 67-83参照。

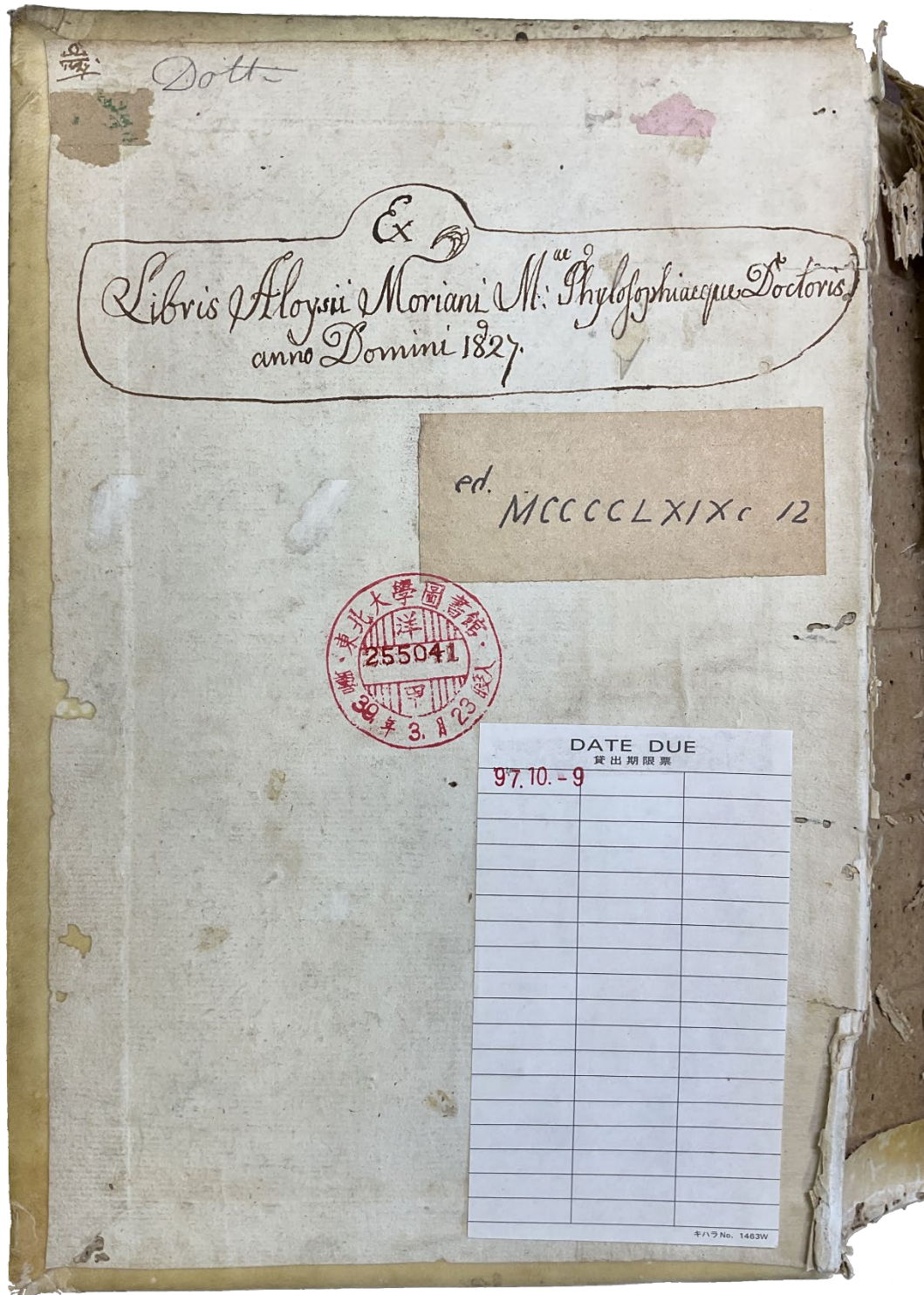


図3 表紙を開いた見返し紙にある手書きのEx Libris。「Ex Libris Aloysii Moriani M: Phylosophiaeque Doctoris anno Domini 1827」とあり、その下には、別の筆跡で「ed. MCCCCCLXIXc 12」と書かれた貼り紙がある。上に受入印が被せてあることから、図書館での登録時にはすでに存在していたと推定される

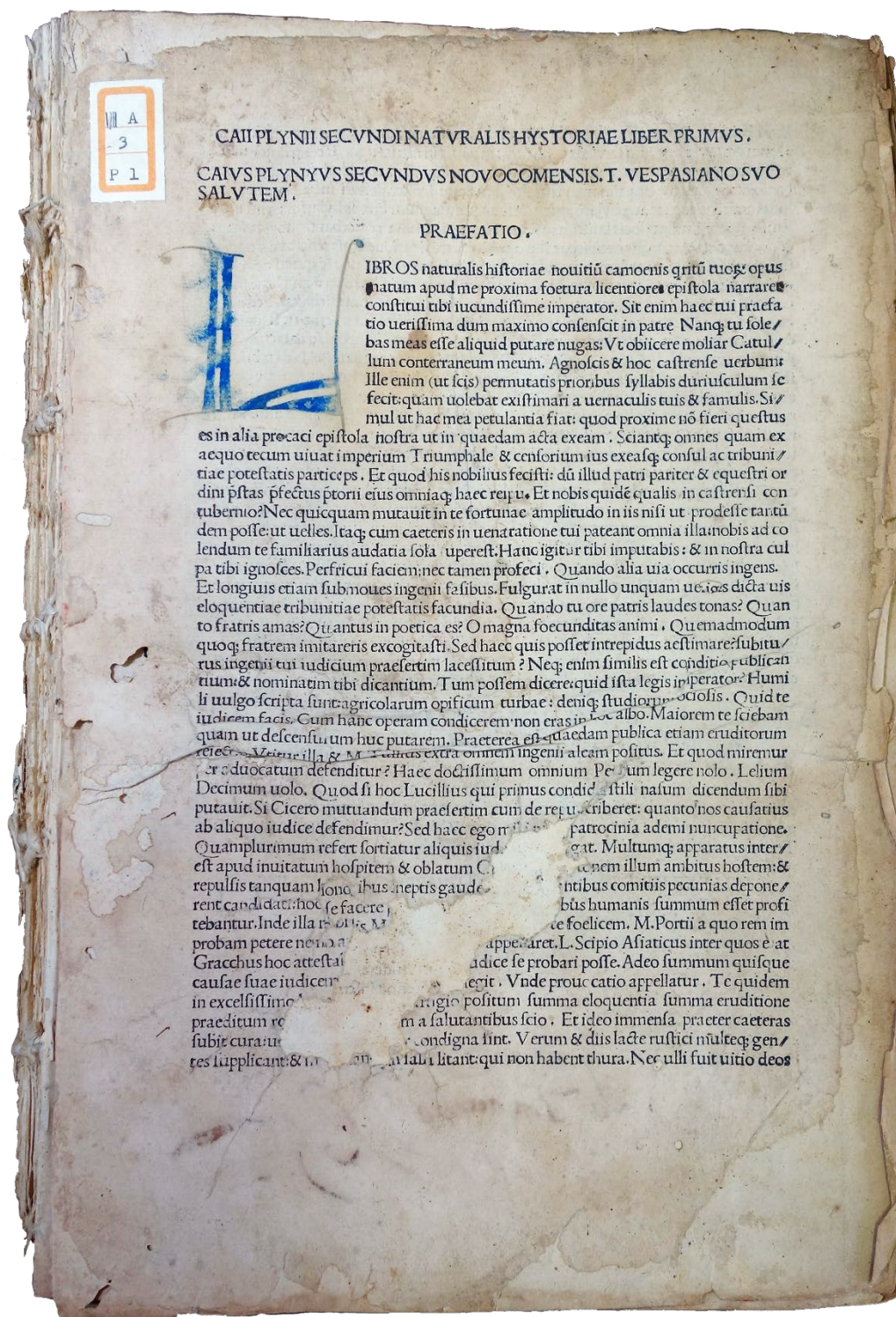


図4 本書の「第1葉」にあたる紙葉。手描きの青い大きな「L」の文字のルブリケーションが目を引き。次の活字と組み合わせると「LIBROS」となる。手間のかかるルブリケーションは、次第に木版イニシャルに取って代わられた

さて、「第1葉」ではまず、手書きの大きな「L」の文字のルブリケーションが目を引き。ルブリケーション(rubricating)とは、印刷で空白にした、またはそこにガイドレター(guide letter)と呼ばれる小さな活字を入れた各章冒頭のイニシヤ

ルを、赤色や青色などのインクで手書きしたもので、写本の伝統を引き継ぐものとされる。この「L」は、つぎの活字での印刷部分の -IBROSへと続き、「LIBROS」となる(図4)。

16世紀以降は、ルブリケーションに代えて木版イニシャルが席卷する。しかしながら、東北大学附属図書館所蔵の『幾何学原論』(1482年)では、すでに木版イニシャルが使用されているため、かりに木版イニシャルがあるからといって、15世紀本から除外されるわけではない。

2.2 本文から

それでは、図4にある「第1葉」の冒頭のテキストを読み下してみよう。

「CAII PLYNII SECVNDI NATVRALIS
HYSTORIAE LIBER PRIMVS./ CAIVS
PLYNYUS SECVNDVS NOVOCOMENSIS.
T.(-itus) VESPASIANO SVO SALVTEM./
PRAEFATIO./ (L)IBROS naturalis historiae
nouitiu(m) camoenis q(ui)rit(i)u(m) tuor(um)
opus natum apud me proxima foetura licentiore
epistula narrare constitui tibi incundissime
imperator. Sit enim haec tui praefatio uerissima
dum maximo consenescit in patre...」⁷

「ガイウス・プリニウス・セクンドゥスの博物誌第1巻。ノウム・コムムのガイウス・プリニウスが、親愛なるティ(トゥス)・ウェスパシアヌスに挨拶を送ります。はじめに。この度、私の最新の労作である博物誌の書を、いささか僭越ながら陛下のお目に掛けることにいたしました。陛下の市民に生来備わる詩才がなさしめた斬新な著作です。きわめて恵み深い皇帝よ、この称号はあなたの父君がかなりお年を召しておられるので、あなたのものとするのが妥当でありましょう。」⁸

つまりはプリニウスによる序文、ティトゥス帝(39-81年、在位79-81年)への献呈の辞である。ちなみにノウム・コムム(Novum Comum)とは、現在の北イタリアの都市コモ(Como)の古名であり、プリニウスの生誕地として知られる⁹。

この序文から、書籍のタイトルが、プリニウスの『博物誌』(Historia Naturalis)であることがわかる。しかし、その刊行のための情報として肝心のコロフォン(に相当する刊記)は、本書のどこを探しても見当たらない。

本書はOPACには未登録であるが、おもての見返し紙に「東北大学図書館」への受入年月日と登録番号が捺印されており、それによれば、「昭和39年3月23日受入」、登録番号は「255041」とある(図5)。「洋甲」は洋書で、購入を示す。また、背と第1葉に貼付された排架記号はVIII A/3/P1である。ここから、現在利用可能なカード体目録および登録簿を検索することにした。

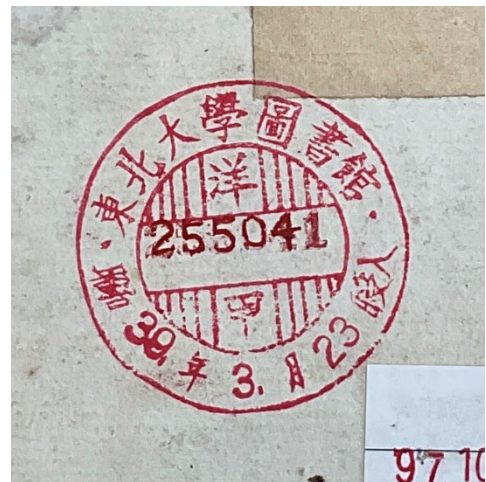


図5 見返し紙に捺された、図書館の登録印。「昭和39年3月23日受入」で、登録番号は「255041」である。「洋甲」は、洋書で、購入したものであることを示す(乙が寄贈)

2.3 カード体目録と登録簿から

1972年までの旧片平分類のカード体目録は、著者名、あるいは排架記号によって検索することができる。ところが、カードボックスを検索すると、著者名と排架記号のどちらにも同じカードが挿入されていた。そこには、

7 現代では使わなくなったロングsは修正し、-umなどの省略を示す略字(abbreviation)はカッコで補った。ただし、V<U, t<c, u<vなどの表記はそのままにした。

8 邦訳は中野定雄ほか『プリニウスの博物誌』雄山閣出版、1986などで読むことができるが、もとのテキストが不明なので、ここでは独自に翻訳した。Harris Rackham (tr.), Pliny, Natural History, Cambridge: Harvard university Press; London: William Heinemann, 1967を併せて参照した。

9 Comumの語源はcommuneではなく、ケルト語のcumbaに由来するらしい。これはとくに緩やかな山あいの地(f flank of a hill)を意味する言葉である。Online Etymology Dictionary, Como: https://www.etymonline.com/word/Como#etymonline_v_28443 (2023.4.8閲覧) なおComumは、もとあった地からカエサルにより移転され、Novum Comumとなったという。

[Plinius, Secundus Caius./ Naturalis historia./ Iv.
(342 leaves). 31cm. (Without titlepage,
pagination and colophon)/ Bi]

と、記載されているだけであった(図6)。

図書館職員が作成する目録に、paginationのような用語を使用することは、おそらくほとんどないとおもわれるので、納品のさいのカタログなどから引き写したのかもしれない。そうすると、販売カタログにも出版地、出版年、出版者の情報はなかったということ、つまり、販売者の側でもそれらについて特定してはいなかったことが推察される。

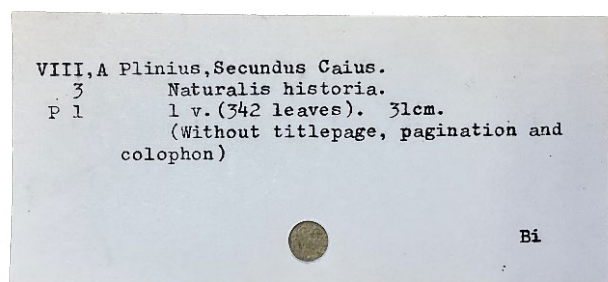


図6 書籍のカード目録の記載。排架記号の他に,「Plinius, Secundus Caius./ Naturalis historia. / Iv. (342 leaves). 31cm./ (Without titlepage, pagination and colophon)/ Bi」とある

また、図5にある登録番号「255041」からは、図書館での登録簿を検索することができる。附属図書館本館所蔵の『昭和三十八年度 洋書原簿』には次のように記載されていた(図7)。

「3(月)23(日)」

(登記番号)255041

(著者書名)Plinius, S.C. Naturalis historia.

(出版地=空白)(刊年=空白)

(部数)1(冊数)1

(価格)30,000-(納入)丸善(保管者)文

この書誌情報は、カード体目録よりもはるかに簡略である。検索目的として作られたわけではない登録簿である以上、当然なのであるが、出版地と刊年の情報も空白であったことで、納入者の側でもやはりそれらを把握していなかったことが明らかとなった。

さらに、その納入者が丸善であり、金額は3万円、受入後は文学部で保管していたことも判明した。上述のカード体目録に記載されていた「Bi」とは、同学部の美学・西洋美術史の研究室であろうか¹⁰。

Kapitalverkehr seit dem letzten		Frank-							
Kriege.		furt	c1963	1	1	3,870-	"	經	以上共 246 16-
3	23 255032 Rodway, A. The romantic conflict.	London.	1963	1	1	1,800-	允善支店	文	
	255033 Brennan, J.G. Three philosophical								
	novelists.	N.Y.	c1964	1	1	2,600-	"	文	
	255034 Davis, E. The flint and the flame.	Colub.	1963	1	1	2,780-	"	文	
	255035 Brockhaus. Der Grosse Brockhaus.								
	16. Aufl.	Wies-	1963	1	1	5,040-	"	文	
	255036 Klages, H. Technischer Humanismus.	Stutt-							
		gart	1964	1	1	2,730-	"	文	
	255037 Podach, E.F. Friedrich Nietzsches								
	Werke des Zusammenbruchs.	Heidel-	c1961	1	1	3,500-	"	文	
	255038 Gehlen, A. Der Mensch. 7. Aufl.	Frank-	1962	1	1	2,730-	"	文	
	255039 Jánoska, G. Die sprachlichen								
	Grundlagen der Philosophie.	Graz	1962	1	1	2,520-	"	文	
	255040 Swartz, P. Psychology.	Prin-	c1963	1	1	2,780-	"	文	
	255041 Plinius, S.C. Naturalis historia.			1	1	30,000-	"	文	
	255042 Wolman, B.B. Contemporary theories								
	and systems in psychology.	N.Y.	c1960	1	1	3,000-	"	文	
	255043 Barnouw, V. Culture and personali-								
	ty.	Home-	1963	1	1	3,000-	"	文	

図7 『昭和三十八年度 洋書原簿』の該当ページ(部分拡大)。下から3番目にPliniusの書籍の記載がある。
丸善から文学部が3万円で購入したことがわかる。

10 この時期に同研究室には西洋美術史、とくに古代美術論の村田潔教授(1909-1973年)が在任している。1937年(昭和12)に

東北帝国大学講師, 1939年(昭和14)同助教授, 1947年(昭和22)同教授, 1972年(昭和47)定年退官。

2.4 『博物誌』の出版史から

さて、プリニウスの『博物誌』が初めて印刷に付されたのは、1469年のことである。ヴェネツィアの印刷業者ヨハン・フォン・シュパイヤー(Johann; Johannes; Giovanni; von Speyer, de Speier, de Spira)による。また、この年をもってヴェネツィアでの活版印刷が開始されたという¹¹。

つぎに『博物誌』が印刷されたのが、年代順に、1470年のローマ、さらに1472年のヴェネツィア、1473年のローマ、そして1476年のパルマ、同1476年のヴェネツィア、1480年、1481年のパルマ、1481年、1483年、1487年、1489年、1491年のヴェネツィア、1496年のブレッシア、同じく1496年、翌1497年、1499年のヴェネツィアの計17版である。判型はいずれもフォリオであった。

これらはすべてイタリアでの刊行であり、とくに17版のうち11版はヴェネツィアで刊行されていた。ISTCで確認される15世紀末までの刊本は以上である¹²。便宜上、出版年の順にこれらに独自の通し番号を振っておく。表1を参照されたい。

①から⑰のうち、⑥⑨⑫の3版はイタリア語なので、本書の

同定の対象からは除外される。ラテン語版には、ローマではシュヴァインハイム&パンナルツの1業者、パルマではコラルスとポルティリアの2業者、ブレッシアではブリタンニコの1業者が携わっており、ヴェネツィアでは、シュパイヤー以下9業者が携わっていた。

②(ローマ、1470年)と③(ヴェネツィア、1472年)については、編者(校訂者)がいずれもヨハネス・アンドレアス(Johannes Andreas)であり、テキストがある程度共通していると予想できる。また、⑤(パルマ、1476年)と⑦(同1480年)は、フィリッポ・ベロアルド(Filippo Beroaldo)編であり、これ以降、同編が⑧(同1481年)、⑩(ヴェネツィア、1483年)、⑪(同1487年)、⑬(同1491年)と続き、全部で6版が同じ編者になる。

さらに、⑭(ブレッシア、1496年)ではジョバンニ・ブリタンニコ(Giovanni Britannico, Johannes Britannicus)が編者となっており、その出版者のジャコモ(Giacomo, Jacobus)はジョバンニの父親であった¹³。この編者は、⑮(ヴェネツィア、1496年)と共通している。最後に、⑯(ヴェネ

表1 ISTCにより確認される15世紀のプリニウス『博物誌』の出版地・出版年・出版者

	出版地	出版年	出版者	ISTC No.	言語
①	ヴェネツィア	1469	Johann von Speyer	ip00786000	ラテン語
②	ローマ	1470	Sweynheym & Pannartz	ip00787000	〃
③	ヴェネツィア	1472	Nicolaus Jenson	ip00788000	〃
④	ローマ	1473	Sweynheym & Pannartz	ip00789000	〃
⑤	パルマ	1476	Stephanus Corallus	ip00792000	〃
⑥	ヴェネツィア	1476	Nicolaus Jenson	ip00801000	イタリア語
⑦	パルマ	1480	Andreas Portilia	ip00792000	ラテン語
⑧	パルマ	1481	Andreas Portilia	ip00793000	〃
⑨	ヴェネツィア	1481	Filippo di Pietro	ip00802000	イタリア語
⑩	ヴェネツィア	1483	Raynaldus de Novimagio	ip00794000	ラテン語
⑪	ヴェネツィア	1487	Marinus Saracenus	ip00795000	〃
⑫	ヴェネツィア	1489	Bartholomaeus de Zanis	ip00803000	イタリア語
⑬	ヴェネツィア	1491	Thomas de Blavis	ip00796000	ラテン語
⑭	ブレッシア	1496	A. & J. Britannicus	ip00797000	〃
⑮	ヴェネツィア	1496	Bartholomaeus de Zanis	ip00798000	〃
⑯	ヴェネツィア	1497	Bernardinus Benalius	ip00799000	〃
⑰	ヴェネツィア	1499	Johannes Alvisius	ip00800000	〃

11 ヴェネツィアで最初に印刷されたのはキケロ『親しき者たちへの書簡(Cicero, Epistolae ad familiars)』(1469年)であり、つぎが同年のプリニウス『博物誌』であった。「ヴェネツィア」(宮下志朗)『印刷博物誌』紀伊國屋書店、2001、p. 468参照。

12 ISTCにてPliny the elderを検索。
<https://data.cerl.org/istc/search?query=pliny+the+elder&from=0>(2023.4.10閲覧)

また、15世紀および16世紀における『博物誌』の刊行については雪嶋宏一「1525年パーゼル版プリニウス『博物誌』について」『早稲田大学図書館紀要』第65号、2018.3、pp. 1-29、とくにpp. 6-8に詳しい。雪嶋氏によれば、『博物誌』は16世紀中には全体・部分・翻訳の刊行が159版に及ぶという。15世紀における刊行の約10倍の規模であることに改めて驚かされる。

13 雪嶋、上掲論文、p. 8

ツィア, 1497年)と⑩(同1499年)とでは, いずれもエルモラ
オ・バルバロ(Ermolao Barbaro, Hermolaus Barbarus)
という, ヴェネツィア生まれの人文学者が校訂したテキストで
あった¹⁴。

このように, ラテン語のテキストでは大まかに6つにグルー
プ分けができそうである(表2)。あとは判型や版面を確認し
ながら特定する。なお, 本書も判型はフォリオである。

表2 『博物誌』校訂者によるグループ分け

	校訂者
①	
②③	Johannes Andreas
④	
⑤⑦⑧⑩⑪⑬	Fillippo Beroaldo
⑭⑮	Giovanni Britannico
⑯⑰	Ermolao Barbaro

2.5 デジタル画像との比較から

手がかりとなるのは, すでに世界で公開されているデジタ
ル画像との比較である。

①の画像は, アメリカ議会図書館(Library of
Congress)で提供されている¹⁵。その最初の紙葉のテキスト
は, 数文字分の空白に続いて「LINIVS secundus nouo-
comensis equestribus militiis...」と始まっている(図8)。

おそらく, 「PLINIVS」となるように, 最初の空白に「P」を
手描きする前提だったのだろう。これは図4に見られる本書の
それとは, 版面が大きく異なっている。したがって, 旧蔵者が
信じたような, 1469年版ではなかったということである。

②の画像はミュンヘン・デジタル化センター(Münchener
Digitalisierung Zentrum: MDZ)から閲覧することがで
きる¹⁶。その10ページ目が本書の第1葉に相当する部分だが,
テキストも活字も一見して明らかに異なっている(図9)。よっ

て, ローマの1470年版でもないことがわかる。

③には, ボストン公共図書館(Boston Public Library)
所蔵資料を参照した¹⁷。②と同じ校訂者であり, 冒頭のテキ
ストも, 「LIBER I.」「DOMITIANO」などと, 微妙に本書と
異なっている(図10)。したがって, ヴェネツィアの1472年版
でもない。

④もMDZをつうじて閲覧できる¹⁸。「第1葉」は「C.
PLYNII SECVNDI NATVTALIS HISTORIAE LIBER
PRIMUS DE HIS QVAE SINGVRIS LIBRIS...」で始ま
る。本書の「CAII PLYNII SECVNDI NATVRALIS
HYSTORIAE...」とは異なっている。これもテキストが異なる
ので, ローマの1473年版でもないということである。

次に, 同じ編者(校訂者)のグループになる6つのペロアル
ド版を確認した。

⑤はメルボルン大学図書館(University of Melbourne
Library)で提供されている¹⁹。その第3葉が本書の第1葉に
当たる。テキストの始まりは本書と同じだが, 「(L)IBROS
NATVRALIS HISTORIAE NO-/uitium camoenis...」
と, 「博物誌の書」に相当するテキストが大文字になっている。

⑦はポルトガル国立図書館(Biblioteca Nacional de
Portugal)で提供されている²⁰。簡略書誌の「44 cm」とい
う大きさからして, すでに対象外にもおもえるが, 装丁のさい
の化粧断ちの仕方にもよるため, 本文を参照する必要はある。
しかし, 冒頭の大文字になっているテキストは⑤と同様であっ
た。また, ⑧もテキストの大文字の部分が同じであった。した
がって, パルマの3つの版すなわち1476年, 1480年, 1481
年版である可能性は完全に排除された。⑨も, MDZで参照
すると²¹, やはりテキストは同じだが, 「NATVRALIS
HISTORIAE」が大文字になっている。よって, ヴェネツィア
の1481年版でもない。

⑩はアメリカ国立医学図書館(National Library of
Medicine)から画像を閲覧することができる²²。その8ペー

14 このバルバロが『博物誌』のテキストに初めて註釈を付けた書籍
(Hermolai Barbari Castigationes Prinianae, Romae)が
1492年に出版されたという。Rackham, op. cit., p. xiii.

15 <https://www.loc.gov/item/48031835/> (2023.4.11閲覧)

16 <https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb00063289?page=4,5> (2023.4.11閲覧)

17 <https://archive.org/details/caiiplyniisecund00plin/page/n5/mode/2up> (2023.4.12閲覧)

18 <https://daten.digitale-sammlungen.de/0006/bsb00063288/images/index.html?id=00063288&groesser>

[=&fip=eayaxdsydweayayztsxdsydyztseayawsdas&no=1&seite=7](https://rest.neptune-prod.its.unimelb.edu.au/serve/api/core/bitstreams/el5e52de-cb35-5c34-bb5a-a65cbd2ddf9a/content) (2023.4.12閲覧)

19 <https://rest.neptune-prod.its.unimelb.edu.au/serve/api/core/bitstreams/el5e52de-cb35-5c34-bb5a-a65cbd2ddf9a/content> (2023.4.11閲覧)

20 <https://purl.pt/32080> (2023.4.11閲覧)

21 <https://daten.digitale-sammlungen.de/~db/ausgabe/n/zweiseitenansicht.html?fip=193.174.98.30&id=00051661&seite=12> (2023.4.12閲覧)

22 <https://collections.nlm.nih.gov/bookviewer?PID=nlm:nlmuid-9414678-bk> (2023.4.12閲覧)

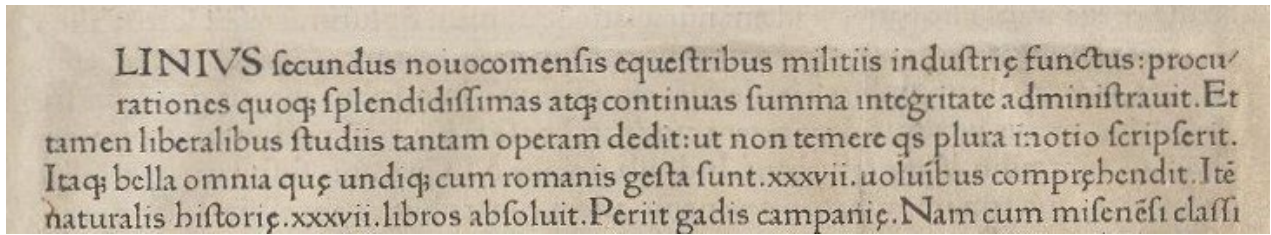


図8 ①の1469年版(部分)の印影(アメリカ議会図書館蔵)

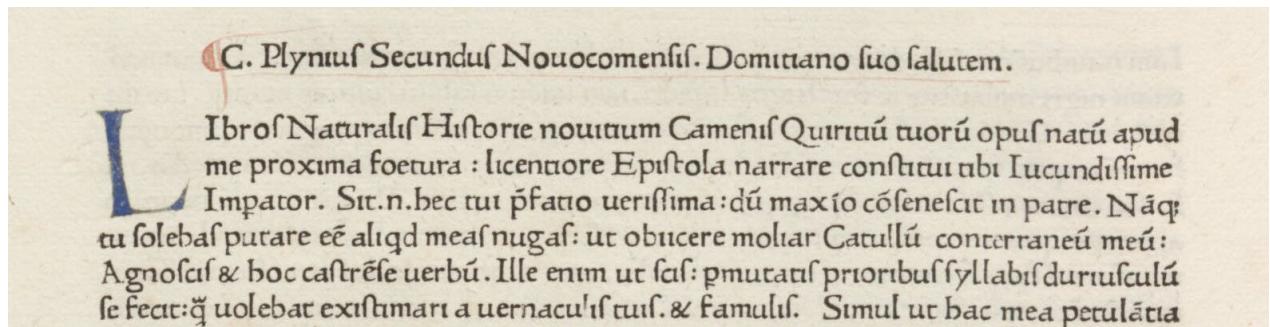


図9 ②の1470年ローマ版の印影(部分, ミュンヘン・デジタル化センター蔵)。テキストも活字も異なっている。

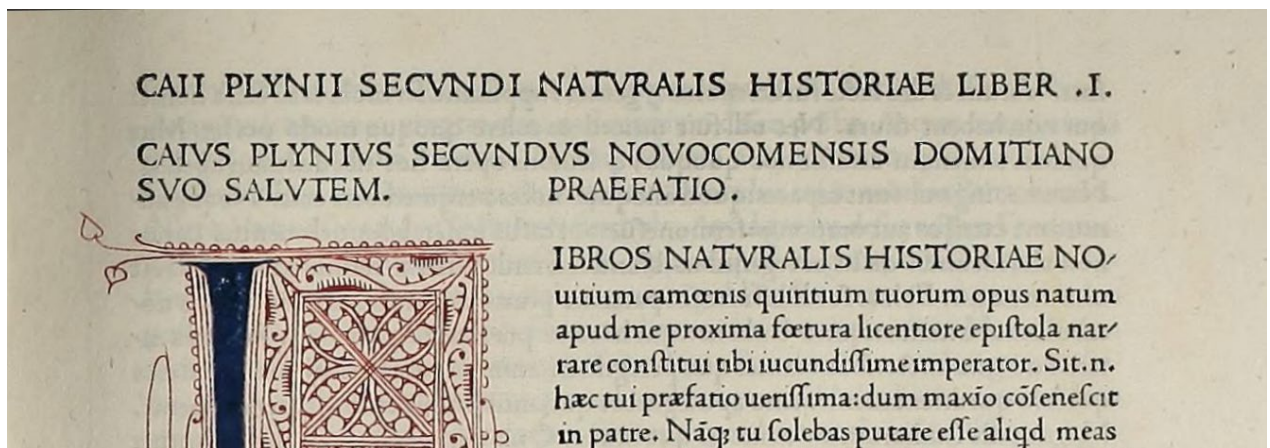


図10 ③の1472年ヴェネツィアの印影(部分, ポストン公共図書館蔵)。「LIBER PRIMVS」が「LIBER.I.」, 「T. VESPASIANO」が「DOMITIANO」となっている

ジ目に相当する箇所が、本書の第1葉の版面と一致した。

これは出版地がヴェネツィアで、出版者はライナルドゥス・ド・ノヴィマジオ(Raynaldus de Novimagio)の、1483年の版である。これが本書の版である可能性は相当に高いといえる(図11)。当時は一つの刷りが終わると貴重な活字を他のテキストの印刷に使用するために解版してしまい、つぎの刷りを同じ版面にすることは、ほとんど不可能であったからである。

そうでないすべての可能性を排除するにあたり、つぎに①については、スペイン文化スポーツ省の「書誌遺産バーチャル図書館」(Biblioteca Virtual del Patrimonio Bibliográfico)から閲覧すると²³、本書の「第1葉」に相当する部分の冒頭が「LIBER.I.」で始まり、「CAIVS PLYNIVS SECVNDVS...」の行が「SALV/TEM」で改行されていた。

③はイェナ大学図書館のCollection@UrMELから参照

23 https://bvpb.mcu.es/es/catalogo_imagenes/grupo.do?path=4982&posicion=7&presentacion=pagina®istrardownload=0(2023.4.12閲覧)

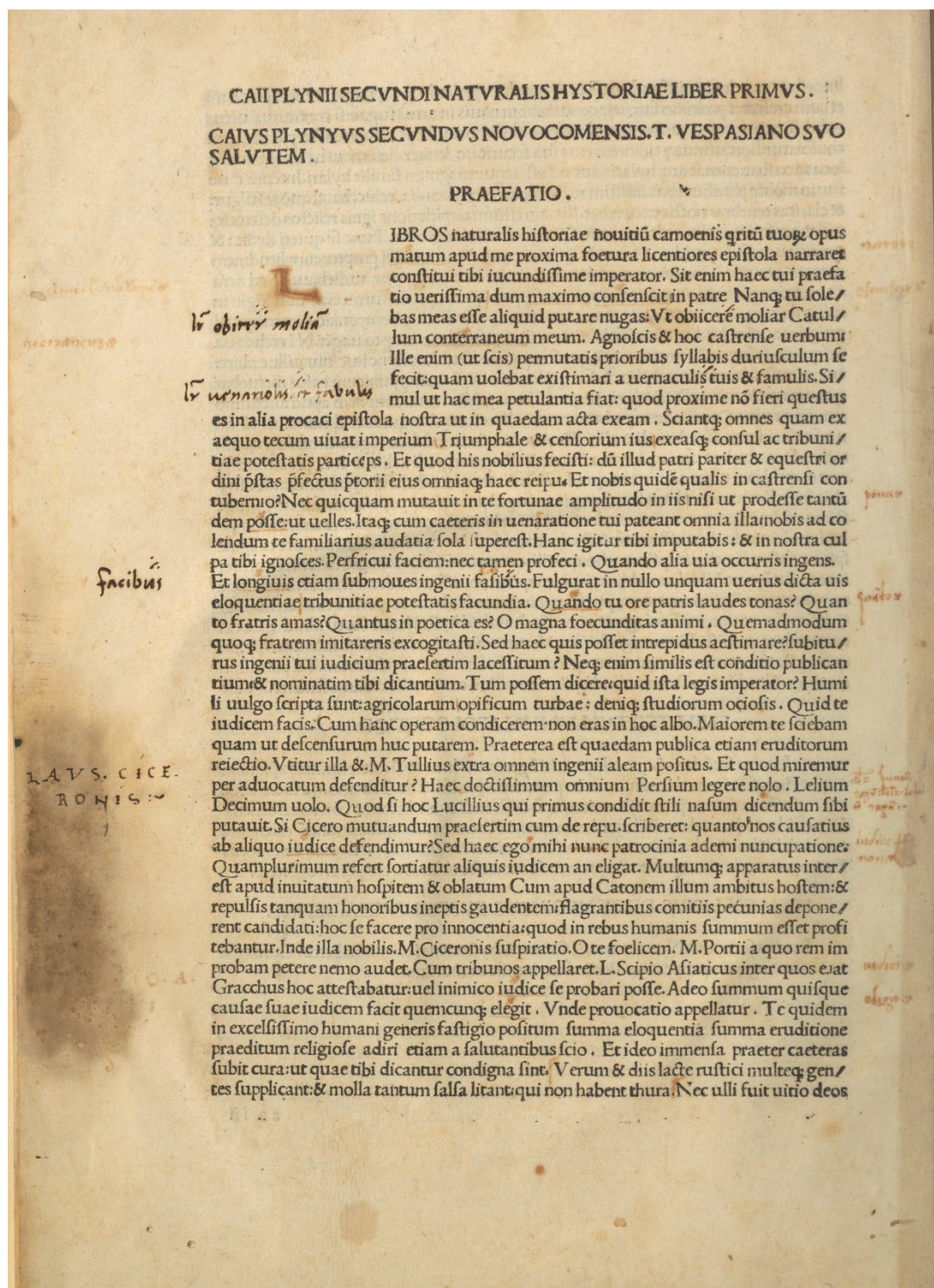


図11 本書の「第1葉」と版面が一致した、⑩の1483年ヴェネツィア版(アメリカ国立医学図書館蔵)。
出版者はライナルドゥス・ド・ノヴィマジオだという

し²⁴、本書とは該当箇所の版面の組み方が大きく異なることを確認した(図12)。

⑭から⑰までについても、デジタル画像により版面を確認したが、一致したものはなかった。本稿での説明は割愛する。

24 https://collections.thulb.uni-jena.de/rsc/viewer/HisBest_derivate_00001264/BE_1137_0003.tif (2023.4.1 2閲覧)

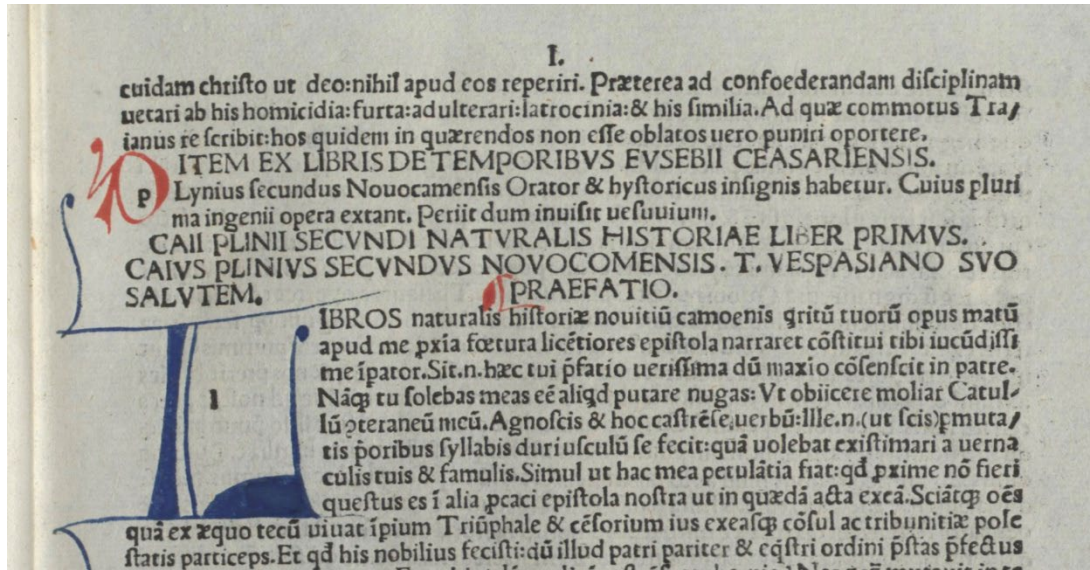


図12 ③の1491年ヴェネツィア版の印影(部分, イエナ大学図書館蔵)。校訂者が同じでも版面は大きく異なっている

たとえ校訂者が同じでも、出版者によって版面は大きく異なる。なお、⑮ではルブリケーションに代えて木版イニシャルがあり、⑰では本文のローマン体の活字に加えて現在のページの「柱」(headline)に相当する箇所にごシック体活字が使用されていた。

活字本の「揺籃期」においては、版面の改良への挑戦が、一版ひと版ごとに積み重ねられていたといえよう。

3. 本書の同定に至るまで

3.1 校合式から

さて、これで本書は、ISTC No. ip00794000に相当するということまで判明した(表1参照)。このNo.からインキュナブラ総合目録(Gesamtkatalog der Wiegendrucke: GW)を参照すると、「GW M34329」が同版に関連づけられていた²⁵。インキュナブラ総合目録とは、ベルリン国立図書館が1925年から刊行し、全27巻を構想する世界的なインキュナブラの所在目録だが、現在までに刊行されているのは、第12巻第4分冊(Band XII Lieferung 4, 2021)の「J」の項までである。とはいえ、2003年からインターネット上にデータベースが公開されているため、「M」の項までは参照することができる。ただし、これは手書きの書誌目録のスキャン画像で

ある(図22)。

上述の通り、本書にはページ付けや葉番号、またキャッチワード(つなぎ語)もないので、そこにある折記号を読むと²⁶、GWでは、

「365 Bl. 2º: aa⁸bb¹⁰a¹⁰-z¹⁰&⁸9⁸r⁸A⁸-H⁸I¹⁰」

となっている。これは校合式(Collation)と言われるもので、簡単に言えば、全部で365葉あるうちの、aaという折記号が8葉(leaf)続き、つぎに折記号bbが10葉続き、そして折記号aからzまでがそれぞれ10葉ずつ続き、さらに折記号&が8葉続き、という意味になる。ちなみに、&のつぎの「9」は算用数字の9ではなく、ラテン語のconを意味する略字であり、「r」はrumを意味する略字である(図13・14)。写本に現れる略字を活字で表したものであって、今日ではほとんど使われないため、書誌を採るさいには注意されたい²⁷。

なお、たとえば折記号aaでは、実際には「aa iii」などと、順序をしめすローマ数字が付されて、これが「aa iiiii」までつづき、その後、4葉ぶんの折記号は見当たらなくなる。そしてつぎに「bb i」が現れる。そうすると、折記号aaを付された全紙は4枚あって、それがそれぞれ二つ折り(folio)されて一つの丁になっていると判断することができる(図15)。本書をフォリ

25 <https://www.gesamtkatalogderwiegendrucke.de/docs/M34329.htm> (2023.5.8閲覧)

26 高野彰、『増補版 洋書の話』丸善、1995、p. 7の図を一部改変。

27 Cf. Adriano Cappelli, Dizionario di abbreviature latine ed italiane, 3. Ed. Riveduta e corretta, Milano, 1929 (旧片平IVA3-100/C1), p. xxiv

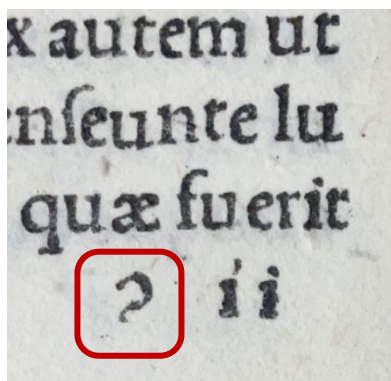


図13 折記号9 [con]

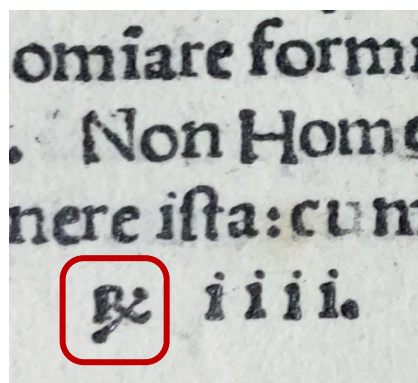


図14 折記号r [rum]

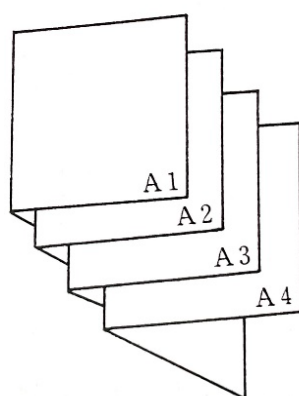


図15 折記号の記載と丁合

I.	—, ^	= m, n.
II.	9, 5	= con, com, cum, cun.
III.	9, 2	= us, os, is, s.
IV.	~ ~ ..	= r, re, ra, ar, a.
V.	2 ~ v ~	= ur, tur, er.
VI.	2, 2, 2	= rum.
VII.	7, &	= et, e.

図16 ラテン語の略字とその意味する語彙

オとした理由もこれである。つまりはこれが、「aa⁸」と表記されるのである²⁸。

さて、本書のCollationを確認し記述すると、上記のGWにおける

365 Bl. 2°: aa⁸bb¹⁰a¹⁰-z¹⁰&⁸9⁸r⁸A⁸-H⁸I¹⁰

に対し、

2°: aa⁸bb¹⁰a¹⁰-z¹⁰ &⁸9⁸ r⁸A⁸-H⁸

となった。校合式の上では、最後の部分を除いてほぼ一致している。校合式に現れない部分を補足すれば、折記号a-zのあいだに、アルファベット順とはいえ、「j」は記されておらず、逆に、sのつぎには「l」[long s]が記されている。jについてはiと見間違えるのを嫌ったために使わなかったのだろう。「l」[long s]については、ドイツ語のß(エスツェット)がs+z, す

なわちf+zの合字ということもあり、我々にも比較的馴染みのある記号である。jがないぶん、アルファベットの数は正しく補われている。

さらに、「aa iiiii」より前の折記号が見当たらず、この記号の付いた葉の前には1葉のみ付いている。また、10葉あるはずの「p」および「H」では、それぞれ1葉ずつ少なかった。具体的には、p10とH8の葉がない。二つ折りだから、p10はp1とともに全紙として1枚だったはずである。p1はある。ということは、改装のさいに落としてしまったのかもしれない。H8についても同様である。ちなみに改装の問題を示すものとして、c10はrectoとversoが逆になった状態でd1の前に綴じ付けられている。もし将来的に本書を保存修復することがあれば、この点は要注意である。

28 折記号と校合式については、高野彰、前掲書、1995、第1章から第3章までを参照のこと。

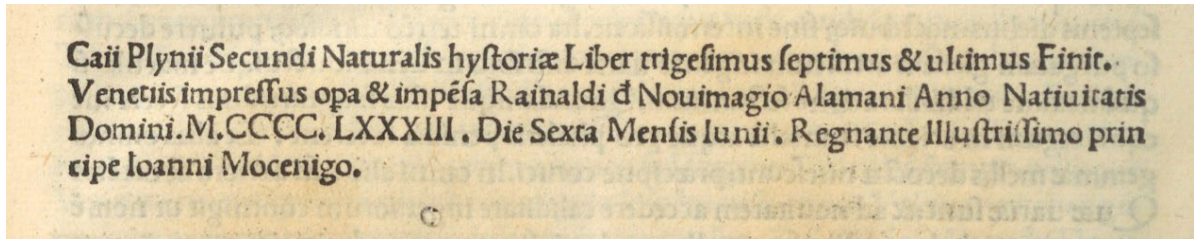


図17 ⑩のコロフォンに相当するSignature I7 versoの印影(部分, アメリカ議会図書館蔵)

「H」より後, すなわち最後の折記号「I」の葉は, すべて存在しない。したがって, 校合式の上ではいちおう同一の版とは推定されるものの, いわゆるImperfect copy(不完全本)なのであろう。GWでは356 Bl (Blätter = leaves)とあるのに対し, 本書には342 leavesしかないことも, 14葉足りない点で校合式と合致する。

3.2 コロフォンをもとめて

もう少し絞り込んでみたい。

GWには, Bl. 353 I7に, コロフォンに相当するものがあると言われる。⑩の電子版でもこの箇所が確認される²⁹。翻刻して訳すと, つぎようになる(図17)。

「Caii Plynii Secundi Naturalis hystoriae liber trigesimus septimus & ultimus finit. Venetiis impressus op[er]a & impe[n]sa Rainaldi d[e] Nouimagio Alamani anno natiuitatis Domini. M.CCCC.LXXXIII. Die sexta mensis Iunii. Regnante illustrissimo principe Ioanni Mocenigo.」
「ガイウス・プリニウス・セクンドゥスの博物誌第37巻にして最終巻が終わる。ヴェネツィアにて, ドイツ人のライナルドゥス・ド・ノヴィマジオの仕事と出費により, 貴顕なるジョヴァンニ・モチェニーゴ元首の統治する1483年6月6日に印刷された。」

この箇所に, 同版の印刷業者がドイツ人のライナルドゥス・ド・ノヴィマジオ(Rainaldi de Nouimagio Alamani)であり, 印刷年月日はM.CCCC.LXXXIII. Die sexta mensis Iunii, すなわち, 1483年6月6日であったことが記されている。本書では, 残念ながらこの紙葉が欠落している。

GWによれば, 折記号「I」の紙葉には, さらに「正誤表」CORRECTIONESや「校合表」REGISTRVM HVIVS

OPERISも含まれていたはずであった。しかし, それらも本書にはない。

また, 冒頭には第1葉(blank)と第2葉があったはずである。すなわち, 本書で「第1葉」とおもわれていたのは, 本来は第3葉に相当するものなのであった。

GWの説明では, Bl. 3b (= b3)に, 「CAII PLYNII SECVNDI NATVRALIS HYSTORIAE LIBER PRIMVS./ CAIVS PLYNYVS SECVNDVS NOVOCOMENSIS. T. VESPASIANO SVO SALVTEM./ PRAEFATIO.」とあるという。すでに見たように, これは本書の「第1葉」の始まりのテキストと一致する。

上で見たティトゥス帝への献辞のある葉のうら側には, 切り出されて裏打ちされた不完全な葉が貼り付けてあるのだが, これは, 本来はaa2 rectoだったものであり, 献辞はそのversoにあった。要するに, 第3葉をうらおもてにして綴じていたのである(図18)。

このように綴じたのは, 改装のさいに, 見出しをタイトル代わりに読ませるためであったのだろうか。

冒頭と巻末近くの葉の欠落は, おそらくは, 何らかの劣悪な保存状態のせいで紙葉がいたんでしまい, 使いものにならなくなってしまったからではないか。そのことは, 遺された紙葉の状態からも推察される(図19)。一面に, 大量の液体による染みのようなものがあるからである。ゆえに, そのタイミングは不明だが, 装丁の様式からすれば, 17世紀以降に, 本文にある程度の手当をほどこした上で, 改装されたのだろう。利用の便を図るためか, あるいは本文が終わりでないことを示すためなのか, 巻末にある印刷された最後の葉のつぎの葉には, テキストのつづきとおもわれる何行かの手書き文字が書き連ねてある。

29 註22で閲覧したp. 708を参照。

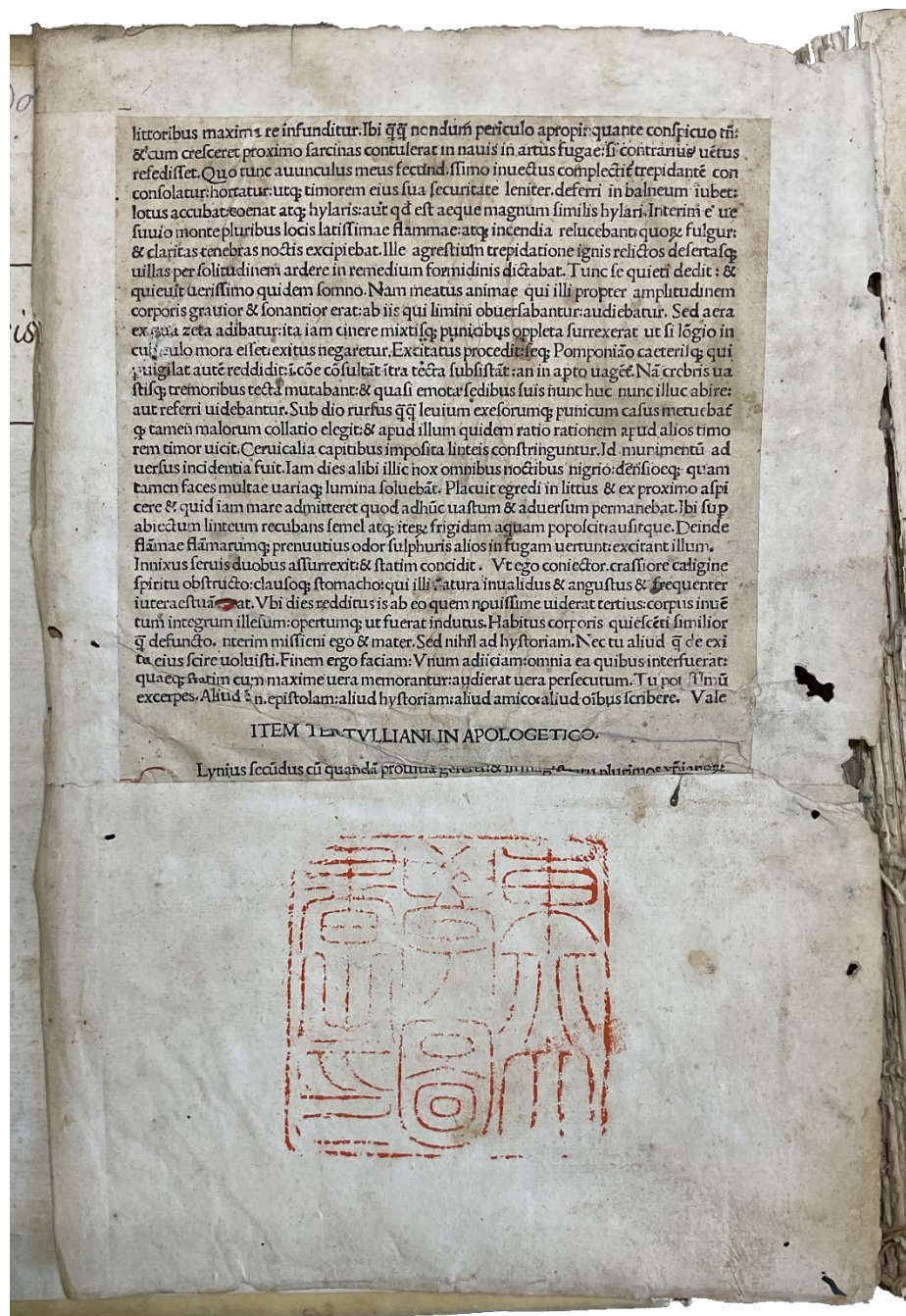


図18 本書の「第1葉」のうら側に、切り出されて裏打ちされた不完全な葉が貼り付けてある。本書にはブランクの第1葉と、第2葉がない。「第1葉」とおもわれていた紙葉は、本来の第3葉がうらおもてにされて綴じ付けられていたものであった

本書は、このようにして、おそらく改装にともないコロフォンをうしなったことで版次が不明となった。旧蔵者にとっては本文を読むことが主目的であって、版を同定することには、かならずしも関心があったわけではなかったのだろう。

その後の所蔵者たちも、版の同定には至らず、初版の年代を掲げて事足れりとしていたにすぎなかった。

3.3 活字について

つぎに版面について触れておきたい。

GWでは、1ページあたりの行数は49行であり、活字はType 6を使用しているとする。本書も49行であるが、折記号aaの丁のみ50行で構成されていた。これについて明確に説明している書誌は見つけられなかった。しかしながら、ベルリン国立図書館が公開している「インキュナブラ活字総覧」

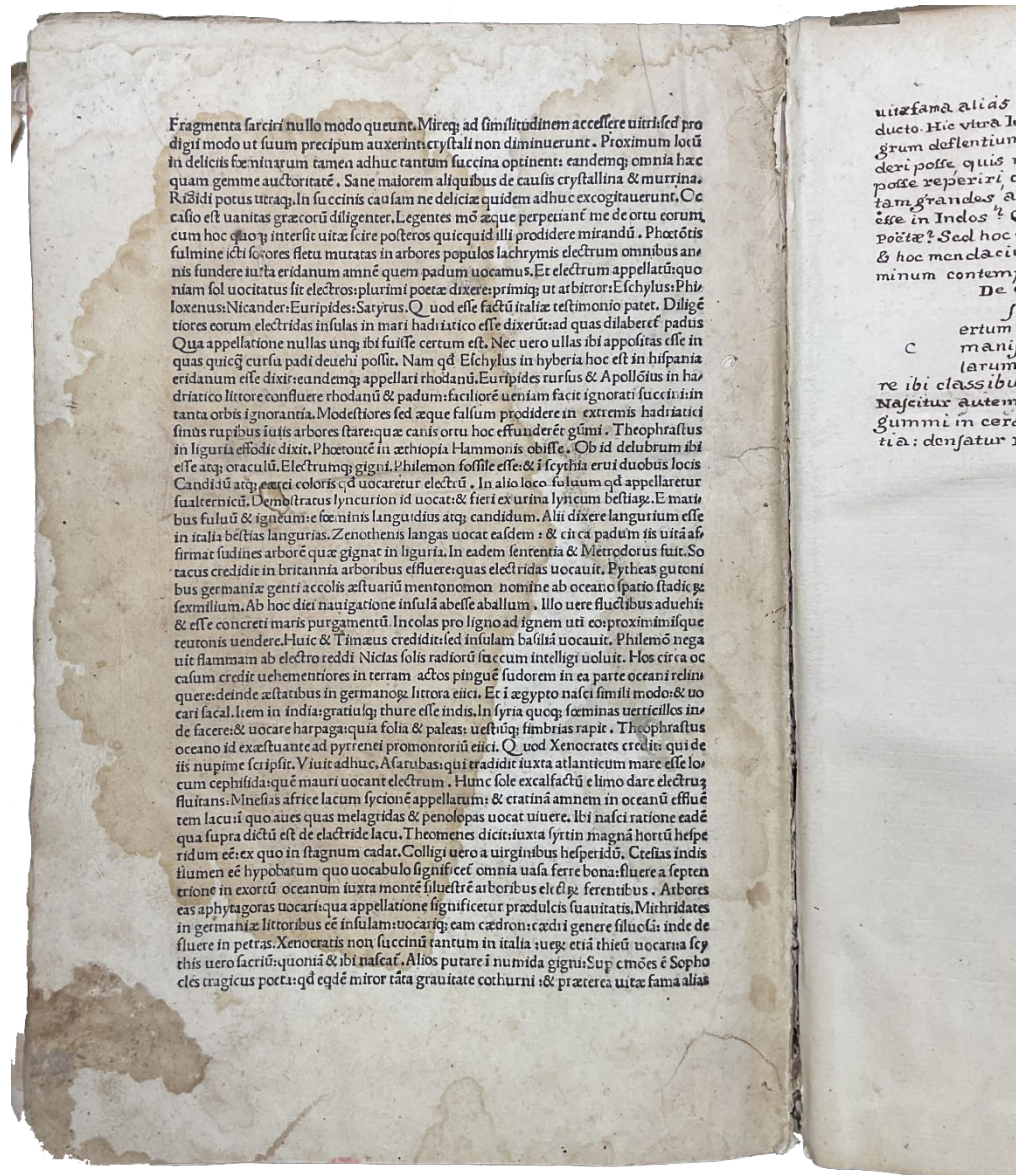


図19 本書の最後の紙葉には、大きな染みがあり、そこから先にあった紙葉が水損したことを疑わせる。
おそらく、改装の後に、テキストのつづきを手書きで埋めようと試みた痕跡も見られる

(Typenrepertorium der Wiegendrucke)によれば、ライナルドゥスが使用したType 6の活字には、「6: 95R」「6*: 90R」「6**: 60R」の3種類があるという³⁰。また、大英図書館BMC V257 (IB 20678)によれば、そのうちのType 90Rが使用されているという。これに対して、オックスフォード大学ボドレーアン図書館(Bodleian Library)のRecord: P-366では、「当館蔵書の最初の丁合4枚では大英図書館のType 90Rではなく、95Rで印刷されている(The first

four sheets of gathering a are printed with type 95R, not 90R as in the BL copy)」としている³¹。

おそらく、Type 6: 95RとType 6*: 90Rが同一版のなかで併用されているか、ことによると、刷りの異なる版があるということなのだろう。本書の折記号aaのみ50行という変則的な構成についても現状では明らかでないが、その観点から分析を進めてみるほかない。今後の課題である。

30 <https://tw.staatsbibliothek-berlin.de/of0041> (2023.5.8閲覧)

31 <http://incunables.bodleian.ox.ac.uk/record/P-366> (2023.5.8閲覧)

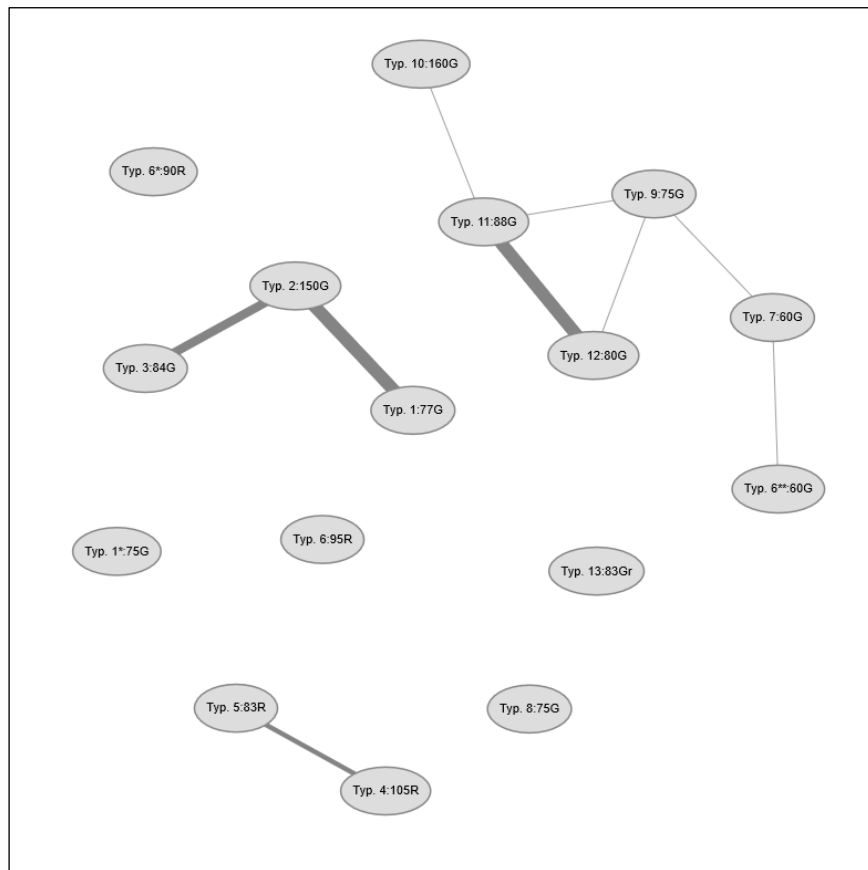


図20 「インキュナブラ活字総覧」において試験的に公開している活字関係図(TNT-Type Network Tool)。Type 6*: 90R(左上)は比較的孤立性の高い活字だとわかる

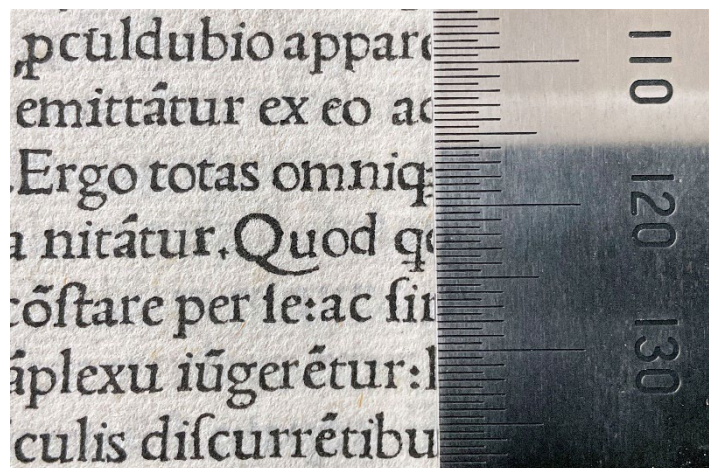


図21 本書の活字のQu-Form。「Q」の尾(tail)が「u」の下まで延長している。尾を含めた「Q」の全体の高さは9mmである

参考までにこの「活字総覧」で試験的に公開している活字関係図(TNT-Type Network Tool)を掲げておく³²。これ

を見ても総じてType 6は他からの孤立性が比較的高いようにおもわれる(図20)。

32 <https://tw.staatsbibliothek-berlin.de/queries/network.xql?id=of0041>(2023.5.23閲覧)

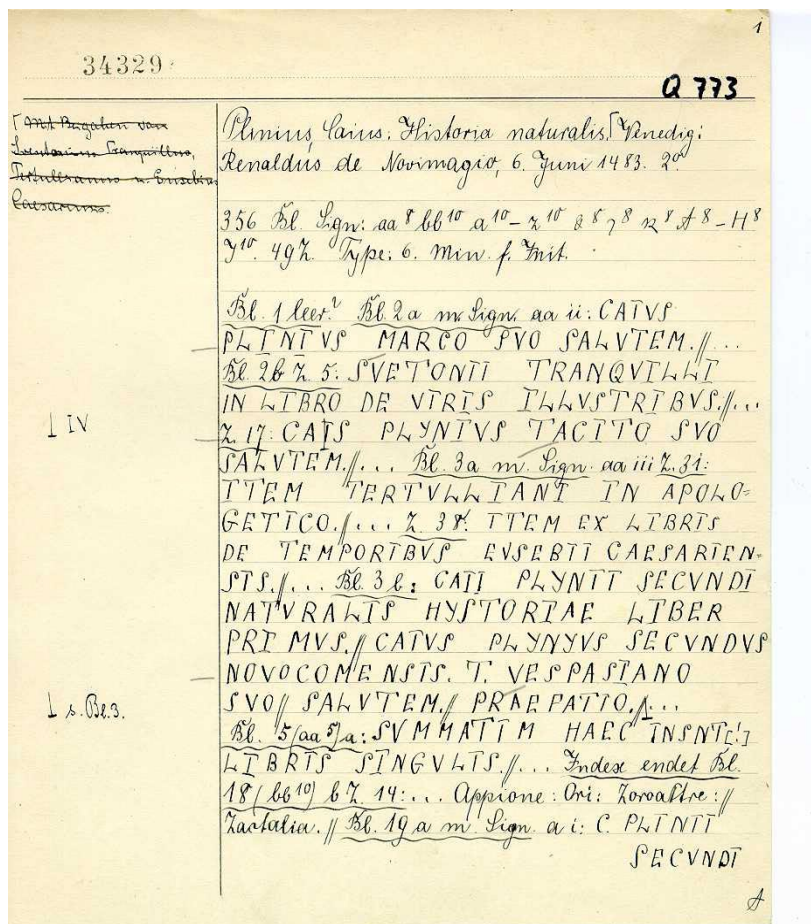


図22 インクynaブラ総合目録(Gesamtkatalog der Wiegendrucke: GW)における、インターネット上に公開されている「M34329」の手書きの書誌目録の一部。最上段には簡略書誌、つぎに校合式などが記述されている

本書の活字もサイズとQu-Formから見て、基本的にType 6*: 90Rと判定してよいと考えられる(図21)。Type 6: 95Rの使用期間がピンポイントで1483年であるのに対して、90Rの活字の使用期間はとくに確定されていないが、本書の推定される刊年の1483年から外れるものでないこともこの推定を強化している。

3.4 紙葉のサイズとミニアチュール

紙葉のサイズ(Leaf size)は、最初に述べたように、301 x 200mmである。リーフサイズを記述している目録は多いとは言えないが、アメリカ国立医学図書館の蔵書の書誌から「306 x 205mm」というデータが得られる³³。また、同サイト

では「area of text: 233 x 143mm」としている。本書のテキスト領域を測ってみると234 x 142mmという数値が出て、1mmほど前後するが、紙葉のたわみや伸びもあるとすれば、同一のものと考えて差し支えないだろう。

また、リーフサイズは一般的に、改装ごとに化粧断ちによって小さくなる傾向がある。縦横ともに5mmほど小さいのはそのせいでもあろう。以上で、1483年版との同一性については、おおそ検証できたようにおもわれる。

すでに述べたように、ルブリケーションは全編にわたってどこされている。しかし、とくに目を引くのは、『博物誌』第2書(Liber Secundus)が始まる(本来の)第18葉(al recto)である。ここにはイルミネーター(写本装飾師)によって「M」の

33 https://catalog.nlm.nih.gov/discovery/fulldisplay?docid=alma997582293406676&context=L&vid=01NLM_INST:01NLM_INST&lang=en&search_scope=MyInstitution&adaptor=Local%20Search%20Engine&t

[ab=LibraryCatalog&query=lds04,exact,9414678&sortby=date_d&facet=frbrgroupid,include,9026662368946858376&offset=0](https://catalog.nlm.nih.gov/discovery/fulldisplay?docid=alma997582293406676&context=L&vid=01NLM_INST:01NLM_INST&lang=en&search_scope=MyInstitution&adaptor=Local%20Search%20Engine&t)(2023.4.8閲覧)

装飾大文字が、そしてそのマージン(余白)には、見事なミニアチュール(細密画)が描かれているのである(図23)。

ただし、本書において装飾大文字と細密画は、この第18葉のみである。『博物誌』第1書は序文と目次からなるので、実質的に内容が始まるのはこの第2書からであるということも、特別にこの装飾をほどこしたことと関係するのではないか³⁴。

3.5 本書の書誌記述

本書の物理的・形態的な側面は以上である。書誌については、つぎのように記述できるだろう。

Author: Plinius Secundus, Gaius (Pliny, the Elder, 23-79)

Short Title: Historia naturalis.

Title: [Caii Plynii Secundi Naturalis hystoriae...]

Imprint: [Venice: Raynaldus de Novimagio, 6 June 1483]

Language: Latin

Format: Folio

Extent: [356] (342 on the copy) leaves

Sizes: 307 x 218 x 66 mm

Referenced in: ISTC No. ip00794000; GW M34329; BMC V 257 (IB 20678); digitized NLM ID 9414678.

Identifier: OGAWA Tomoyuki at the Tohoku University Museum

Call Number: VIII A/3/P1

Holding ID: 255041

Registered: On March 23th 1964

Signatures: 2a⁸ 2b¹⁰ a-r¹⁰ [long s]¹⁰ s-z¹⁰ &⁸ [con]⁸ [rum]⁸ A-H⁸ I¹⁰.

Provenance: Inscription: “Ex Libris Aloysii Moriani M: Philosophiaeque Doctoris anno Domini 1827” on front past-down end paper. 1 piece of paper pasted: “ed. MCCCLXIXc 12” on frond past-down end paper. Inscription: “ed. MCCCLXIXc 12” and “1469” on end past-down

end paper. Unreadable inscription: “... anno domi/ni MDCCVIII” on the leaf b10 verso. Embossed character on upper part of leaf a1 recto.

Contents: “CAII PLYNII SECVNDI NATVRALIS HYSTORIAE LIBER PRIMVS./ CAIVS PLYNYVS SECVNDVS NOVOCOMENSIS. T. (-itus) VESPASIANO SVO SALVTEM./ PRAEFATIO./ LIBROS naturalis historiae nouitiu(m) camoenis q(ui)rit(i)u(m) tuor(um) opus/ natum apud me proxima foetura licentiore epistula narrare/ constitui tibi incundissime imperator. Sit enim haec tui praefa/tio uerissima dum maximo consenescit in patre...” on leaf aa3 verso (?). “C. PLINII SECVNDI NATVRALIS HISTORIAE LIBER SECVNDVS INCI./ ANFINITVS SIT MVNDVS CA. I./ MVndum & hoc quod nominee alio CAElum appellari libuit ...” on leaf a1 recto. “CAII PLYNII SECVNDI NATVRALIS HISTORIAE LIBER TERTIVS./ PROHEMIVM.” in the line 25 on leaf b5 verso.

Notes: Bound in vellum; gilt-tooled on spine which reads: C. Plinii /Historiae. Title from on leaf aa3 verso. Leaves printed on both sides; without foliation, pagination and catchwords; 49 lines per page. Signatures aa has 50 lines per page. Guide letters. Type 6*: 90R. Leaf size: 301 x 200 mm; area of text: 234 x 142 mm. Leaf a1 recto rubricated & miniated. Leaves aa1, aa2, p10 and H8 – I10 are lacking in the Tohoku University Library copy. Therefore, the copy has no colophon, corrections and register. 3rd (1st in the copy) Leaf miss-bound recto to verso. Leaf c10 miss-bound recto to verso forward of leaf d1. Without fly-leaf; worm-damaged on several leaves. book-spine detached.

34 このa1 rectoには、紙葉の上部右に何らかのアルファベットを模したような空押し(emboss)が見られる。今後その由来を調べ

ることで本書のつくりや来歴について新たな情報が得られるかもしれない。

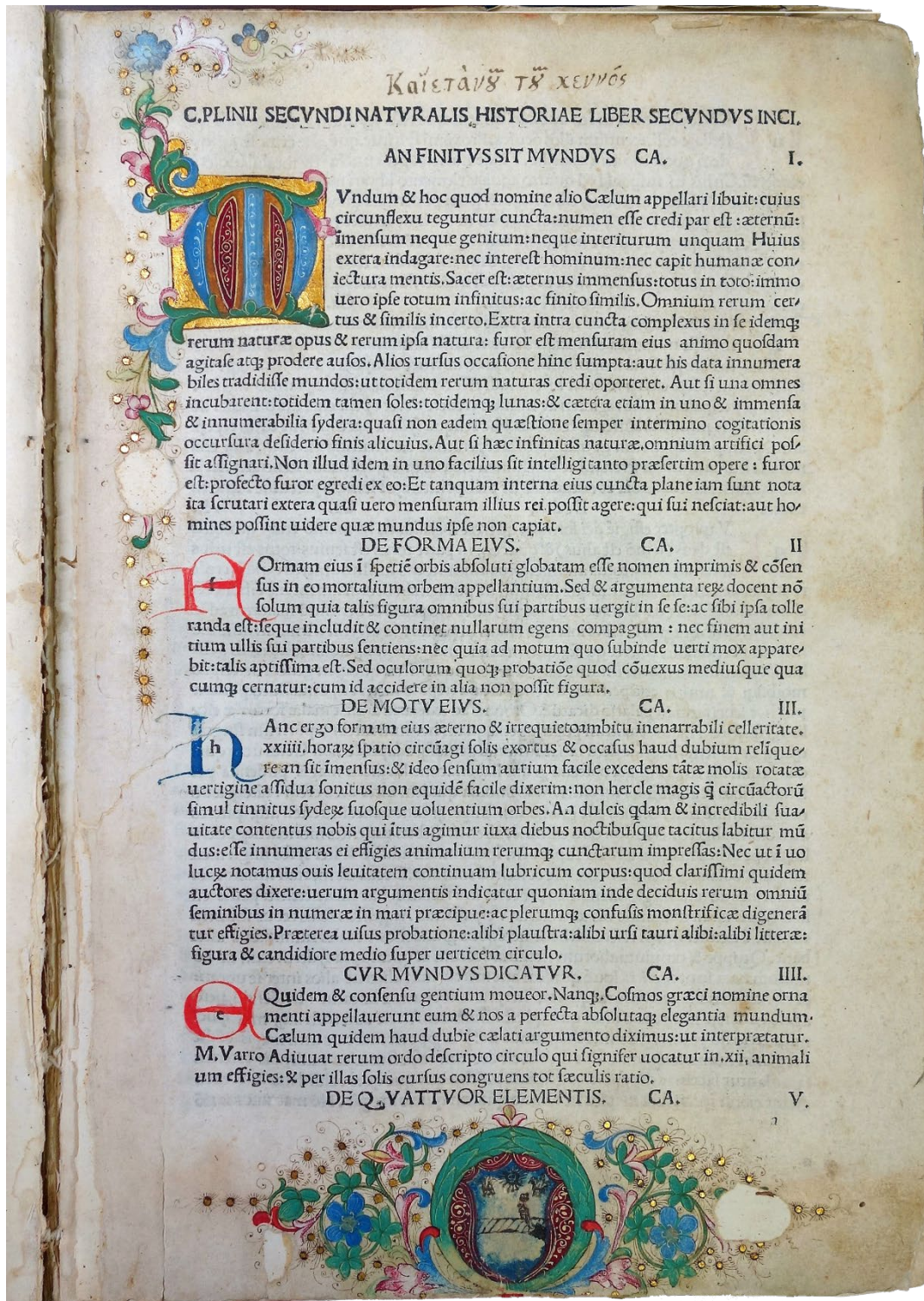


図23 本書の本来の第18葉(a 1 recto)には、イルミネーター(写本装飾師)によって「M」の装飾大文字が、そして余白には見事なミニアチュール(細密画)が描かれている。この紙葉から、『博物誌』第2書、すなわち本編が始まる

わが国で確認されているインキュナブラ相当の『博物誌』は、ラテン語版では1472年、1479年、1496年、1499年版の4

版(計6冊)であり³⁵、1483年版の本書は、新たに追加される版となる。

35 所蔵は1472年版が明星大学図書館、広島経済大学、印刷博物館、1479年版と1496年版がともに金沢工業大学、1499年版が

天理大学附属天理図書館である。雪嶋、上掲書、pp. 131-132 参照。

3.6 出版者ノヴィマジオについて

ここで、出版者について簡単に触れておきたい。

コロフォンでは「ドイツ人のライナルドゥス・ノヴィマジオ (Rainaldi de Nouimagio Alamani)」とあったが、出身地のネーデルラントでは、ナイメーヘンのライネルデ (Reinelde van Nijmegen) とも呼ばれている³⁶。

生没年は不詳であり、1477年にはヴェネツィアで、ドイツ人のテオドア・フォン・レインスブルク (Theodor von Rynsburg) とともに印刷を始め、1479年に独立した³⁷。この頃、イタリア人女性のパウラ・ダ・メッシーナ (Paula da Messina) と結婚し³⁸、彼女が2人の印刷業者の寡婦であったことが、この独立に有利に働いたらしい。

その印刷業者の一人はヴェネツィアの最初の印刷業者ヨハン・フォン・シュパイヤー (†c.1477) であり、もう一人はヨハン・フォン・ケルン (Johann von Köln†1480) であった。ノヴィマジオは1496年までの活動期間に38点の書籍を出版した。そのうちの25点は1483年までに出版しており、この7年間で人生の中で、もっとも精力的に活動した時期であったといえる。

パウラは1480年に死去するが、最期を看取ったノヴィマジオはその遺産を継承し、彼女の3人の息子も引き取るようになったという。遺産のうちには、活字などの印刷関係の設備や出版の権利などもあっただろう。ヨハン・フォン・シュパイヤーが1469年にヴェネツィアで初めて『博物誌』を出版していたことも、1483年にノヴィマジオがこのタイトルを出版したことで、まったくの無関係ではなかったに違いない。

4. プリニウスと『博物誌』について

それでは、本書の著者である(大)プリニウスとは、どのような人物であったのだろうか。プリニウスは、博物学者として、

また、ポンペイ他3つの町を滅ぼしたウェスウィウス山 (Mount Vesuvius, ヴェスヴィオ山) の大噴火により命を落としたことでもよく知られている。

ウェスウィウス山は、79年8月24日の午後1時頃に約300年の眠りから醒め、怪しい噴煙を上げ始めた。ナポリ湾を挟んだミセヌム (Misenum) という町に艦隊司令官として赴任していたプリニウスは、甥で養子のプリニウス (小プリニウス) とともに、湾の向こうの上空に、カサマツのような形の雲を見たという³⁹。最初に気づいたのは、邸宅にいた小プリニウスの母であり、彼女が小プリニウスに知らせ、彼が、午前中の公務から帰宅していた大プリニウスに声をかけ、眺望のよい高台へと連れだったのだとも言われている。

瞬時に危機を悟ったプリニウスは、現況確認と友人たちの救出のため、艦隊を率いてポンペイの南西約5キロメートルの地点にあるスタビアエ (Stabiae) という町に向かった。町に入ると間もなく火山弾や礫が降り注ぎ、やがて家屋を倒壊させるまでになった。船を停泊させている海への退路もすでになく、噴煙の中で絶命したという。55歳であった。死因は窒息、あるいは、火山性の有毒ガスによる中毒だったのではないかとされている。

噴火の降灰と地震は、ミセヌムの邸宅に残った小プリニウスをも襲っていた。彼は、母を守りながら避難した高台から、冷静に辺りを観察していた。のちにコルネリス・タキトゥス宛の書簡のなかで、そのときのようすを記している。

「海までもが地震によって押し戻され、後退しているように見えました。魚がたくさん砂浜に打ち上げられていました。振り返ると、恐ろしい黒雲が閃光と巨大な炎に引き裂かれ、大きな口を開けていました」⁴⁰。

小プリニウスは、2日後にスタビアエから生還した大プリニウスの部下たちから、叔父の死を知ることになった。

36 その名からすれば、おそらくヘルダーランド (Gelderland) の都市ナイメーヘン出身であろう。ナイメーヘンは古代ローマ都市に由来し、ラテン名を Noviomagus という。New Market の意味である。Novimagio はこれをイタリア語に変化させた形である。ただし、ナイメーヘンではなく、シュパイヤー (Speyer, Novimagus Nemetum) 出身だという説も近年現れている。Christian Coppins, Giovanni da Colonia, aka Johan Ewylre/Alwylre/ Ahrweiler: the Early Printed Book and Its Incestors, in: La Bibliofilia, 116 (2014), pp. 113-119. そうすると、ヴェネツィアで1469年に初めて博物誌を印刷に付したヨハン・フォン・シュパイヤーと同じ出身であったということなのだろうか。ライナルドゥスは呼び名が重なることを嫌ってノヴィマジオの名を採用したのだろうか。

37 Mary Kay Conyers Duggan, Italian Music Incunabula. Printers and Type, University of

California Press: 1992, Part II, VII: Venice の Rainaldo de Novimagio の項を参照。

38 パウラは、15世紀ルネサンス期の著名な画家アントネロ・ダ・メッシーナ (Antonello da Messina, 1430頃-1479年) の娘であった。「受胎告知」は、パウラをモデルにしたとの説もある。Cf. Gustav Ludwig, Antonello da Messina und deutsche und niederländische Künstler in Venedig, Jahrbuch der Königlich Preussischen Kunstsammlungen 23. Bd., Beiheft zum Dreiundzwanzigsten Band (1902), pp. 43-65.

39 ロバート・ハクスリー (植松靖夫訳) 『西洋博物学者列伝』悠書館、2009、デイヴィッド・サットン「大プリニウス」の項を参照。

40 神田盾夫 (校註) 『プリニウス書簡選』岩波書店 (岩波ギリシア・ラテン原典叢書) 1950、タキトゥス宛書簡 VI, 16 および 20 参照。

プリニウスは西暦23年に、北イタリアのコモで裕福な市民の家庭に生を享け、長じてローマに学び、騎士身分(エクィテス)となった⁴¹。経済力を背景として、貴族(ノビレス)とともに軍事・行政の面でローマ帝政を支える階層である。23歳でキャリアを開始し、父の友人でもあった軍司令官ポンポニウス・セクンドゥスのもとで騎兵大隊の隊長となってゲルマーニアの各地に駐屯した。その後ローマに戻って法律を学び、ネロ没後の内乱を収拾した、たたき上げ軍人のウェスパシアヌス帝のもと、70年に公職に就いた。

さらに、のちの皇帝ティトゥスのもとで代官(プロクラートル)としてヒスパニア・タラコネンシス(スペイン北部)に赴任し、帝国領内の各地を転任すると、またイタリア本土に戻り、77年に『博物誌』を上梓した。ティトゥスへの献辞は上で見たとおりである。

小プリニウスによると、プリニウスは夜明け前から仕事を始め、公務以外の時間は読書や書きものに費やしたという。読書をやめるのは浴槽につかるときだけ、身体を拭いて乾かしているときは仕えの者に口述させるという徹底ぶりであった。

『博物誌』のほかにも、騎兵隊長のときには『騎兵槍術』1巻や『ポンポニウス・セクンドゥスの生涯』2巻、その後も、『ゲルマーニア戦記』20巻、『弁論術学習』3巻など、全部で七つの書をもしたが、『博物誌』37巻以外は散逸してしまい、後世に残らなかった。

※

『博物誌』は、その序文によれば、「私プリニウスは、そのほとんどが難解さゆえにこれまで論究されることのなかった約二千冊を読破し、調査した百名の著述家から得た考慮に値する二万の事象に、これまで知られていなかった、またそれ以後の経験により発見された多くの事象を加え、全三十六巻にまとめた」ものであった⁴²。

構成は、序・総目次(第1書)、宇宙・気象・地球(第2書)、地誌(第3-6書)、人間(第7書)、動物(第8-11書)、植物(第12-19書)、薬(第20-32書)、金属(第33-34書)、絵画と画材(第35書)、岩石鉱物(第36書)、宝石(第37書)となっており⁴³、いわば一種の百科全書であった。

多くはプリニウス自身の観察・実験・分析などにはもとづい

ておらず、よって、現代の経験主義的な自然科学からすれば迷信だったり、荒唐無稽だったりする記述も散見される。たとえば、動物の記述ではヤマアラシが針を発射するとか、カエルは溶けて春に再生するなど。人間の記述では、よく知られた東方諸国の犬頭人(cynocephali)、一本足の傘足人(skiapodae)などへの言及である。すでに8世紀や9世紀にも『博物誌』の内容は、議論の俎上に載せられていたという。

しかし、それは「驚異の書」として、そしてフィンドレンによれば、「既知の世界をさらに遠くまで範囲を広げて探索し、その驚異をカタログ化しよう(ルネサンス期の)博物学者たちの好奇心を鼓舞した」のであった。アリストテレスが自然を第一原理に還元する哲学的な形式をあたえたのに対して、プリニウスが要求するもの、それは拡張的な知識、無限のコレクションへのアプローチであり、『博物誌』はその案内役であったという。

したがって、「発見の時代」の15世紀におけるヨーロッパ人にとって、その既知の世界の拡大とともに『博物誌』が大いに価値あるものの一つとして印刷に付され、これを模範として、また凌駕すべきものとして後世に受け継がれ、人びとに多大な影響を及ぼし、今日まで生き存えたことも、決して故なしとしないのである。

5. おわりに

最後に、この度の発見について簡潔にまとめておく。

書庫で見つけたプリニウスの『博物誌(自然誌)』(Plinius Secundus, Gaius, Historia Naturalis)は、外形縦307mm、横218mm、厚さ66mmで、およそ17世紀から18世紀前半までの様式に見えるパーチメント装であり、箔押しにより「C. PLINII / HISTORIAE」の背タイトルがあった。見返し紙には旧蔵者による書き込み(Ex-libris)と、手書きで「ed. MCCCCLXIXc 12」などの貼り紙があったが、附属図書館のカード体目録および原簿ともに刊年等の出版事項の記載はなかった。

見返しの押印は「昭和39年3月23日受入」であり、1964年に丸善が納品し、文学部が管理したこと、そのさい「Bi」、すなわち美学・西洋美術史が関係していたのではないかと考え

41 以下の記述では、ハクスリー、前掲書、雪嶋、上掲論文、pp. 4-6、また、Harris Rackham (tr.), Pliny, Natural History, Introductionを参照。

42 ポーラ・フィンドレン(伊藤博明ほか訳)『自然の占有 ミュージアム、蒐集、そして初期近代イタリアの科学文化』ありな書房、2005、p. 95の訳文をもとに一部変更。

43 西村三郎『文明のなかの博物学 西欧と日本(上)』紀伊國屋書店、1999、pp. 291-297参照。

られる。価格は3万円である。その他の洋書はおおよそ1,000円から3,000円程度であった。端数を切った形式的な意味での金額であった可能性はあるが、当時の国家公務員初任給上級(甲)の月給が19,100円、現在の総合職(大卒)は189,700円(令和4年)なので約10倍、これに応じて時価30万円相当とすれば市場価格の見当が付けやすいだろう。個人的な見解としては高くも安くもない。ただし、インキュナブラとわかっていればこの価格には到底おさまらなかったに違いない。むろん、書籍の価値は市場価格だけで判断することはできない⁴⁴。

本文には全編にルブリケーションがほどこされ、第18葉には見事なイルミネーションとミニアチュールが描かれている。これだけでも15世紀本の要件を満たしている。他館所蔵の同タイトルとのデジタル画像との比較、そして基礎となる各種の書誌記述との対比により、[Venice: Raynaldus de Novimagio, 6 June 1483]の版であることが判明した。ISTC No.ではip00794000, GWではM34329に相当する。同タイトル(ラテン語版)のインキュナブラは、わが国で4版6冊の所蔵が確認されているが、この1483年版は初である。

このように540年前の書籍であれば、完形で遺されているものは多いとはいえない。本書も例に漏れずImperfect copyであった。折記号でaa1, 2のほか、p10, およびH8からI10まで欠落していた。この折記号I以下の箇所にはコロフォンが付されていたため、これまで出版事項が特定されず、そのせいでOPAC登録が遅れたのだろう。欠落したテキストの続きの一部は、旧蔵者が手書きで補おうとした痕跡が見られる。また、本書の第1葉は、本来は第3葉に相当し、その前の葉は欠落しているので、本来の第3葉がおもてうらに綴じ付けられ、その葉の見出しが「CAII PLYNII SECVNDI NATVRALIS HISTORIAE LIBER PRIMVS.」と、標題の代わりとして使われていた。

いずれにしても、このような一部の欠落によって本書がその価値を減ぜられることはほとんどないだろう。とくに、ルブリケーションとイルミネーションは、本学の他の貴重図書には、おおよそ見当たらずのものであり、その意味でも唯一無二である。

将来的には貴重図書として運用することになるだろうが、なるべく多くの研究者と学生の閲覧機会があればと願っている。また、経年劣化と以前の保存環境のために見返し紙が切れており、綴じ糸が露出している。一部の紙葉は綴じが切れている。紙葉の「のど」側には、わずかな虫損が見られる。附属図書館には、最低限の保存修復への対応をお願いしたい。一方、予算次第でデジタル画像化がもし可能であれば、国内外での今後の研究のための有益なツールとなるだろう。

本書が本学を代表する書籍の一つとなりうることは言うまでもない。

なお、書誌記述にあたって早稲田大学の雪嶋宏一名誉教授にご助言いただいた。記してお礼申し上げる次第である。

Plinius Secundus, Gaius, *Historia Naturalis*,
[Venice: 1483]
found in Tohoku University Library
by OGAWA Tomoyuki

SUMMARY

The 1483 Venetian Latin edition of Pliny's *Natural History* has been found in Tohoku University Library; it was purchased through a bookseller in 1964, and the colophon was missing and the edition unknown. The edition has now been identified by comparison with images and catalogues of incunabula held by other overseas libraries. This book is unfortunately an Imperfect copy, but there are in Japan only four Latin editions of the incunabula with the same title. The discovery led to the new addition of a 1483 edition of Pliny's *Natural History* to the Incunabula collection of Japan.

おがわ ともゆき, 学術資源研究公開センター・総合学術博物館助教, 附属図書館協力研究員

44 本学が百周年の年に名誉教授の岡本宏氏より寄贈を受けた、ダーウィン著『種の起源』初版本(On the origin of species by means of natural selection, or the preservation of favoured races in the struggle for life by Charles Darwin)は1859年刊であるが、1997年に岡本氏が300万円で購入されたものであった。1999年には410万円、2009年に

は1,500万円で落札されたという記事がある。初版は1,250部が印刷され、現存が確認されているのは275冊。であれば、あまりに高額である。投機的な目的も価格に反映しているのだろう。小川知幸『『種の起源』初版本の寄贈と保存修復』『東北大学附属図書館調査研究室年報』第1号, 2012参照。